



International Conference on Science and Technology for Sustainability 2025
持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議 2025

**Strengthening research capability and promoting
international talent mobility and circulation:
a focus on early career researchers
who will lead the academia of the future**

将来の学術を担う 若手研究者を中心とした 研究力強化と 頭脳循環を目指して

Conference Report

会議報告書

February 11^{WED}_{th} → 12^{THU}_{th}, 2026

[Organizer] Science Council of Japan 【主催】日本学術会議

持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議 2025

「将来の学術を担う若手研究者を中心とした 研究力強化と頭脳循環を目指して」

会議報告書

目次

1.	主催者挨拶	-----	1
2.	会議について	-----	3
3.	コンセプトペーパー	-----	4
4.	プログラム	-----	6
5.	会議報告	-----	8
6.	写真	-----	15
7.	開催実績	-----	21

1. 主催者挨拶

光石 衛 日本学術会議会長



本日は、皆様を「持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議 2025」にお迎えできることを大変光栄に存じます。

持続可能な社会を創造していくことは、世界的に非常に重要な課題であり、日本学術会議は、提言の発出やシンポジウムの開催等、課題解決に積極的に取り組んでおります。2003年からは、国内外の著名な専門家にお集りいただき、地球規模の課題への解決策を探るため、「持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議」を日本学術会議が主催しております。

今回の会議では、「若手研究者を中心とした研究力強化」および「国際頭脳循環促進」の二つのテーマに関し、国内のみならず、海外拠点で研究責任者としてご活躍中の日本人並びに外国人研究者をお招きし、基調講演やパネルディスカッションを通して、その解決策へのヒントや方向性を議論します。

私たちの社会は、人口減少・超高齢化、気候危機、そして生成 AI をはじめとするデータ科学の急速な進展という複合課題に直面しており、こうした課題へ対応していくためには、多様な知の創出と社会的活用が不可欠です。

その担い手としての学術を支えるために、日本学術会議は昨年 11 月、研究エコシステムの持続性を取り戻すための提言「研究力の危機と再構築」を公表しました。提言は、基盤的資金の脆弱化、任期付き雇用の拡大によるキャリア不安、研究時間の減少、研究インフラの老朽化など、分野横断で共有される課題を明確化し、安定的資金と人材の厚みを取り戻す包括策を示しています。

時に、私たちの研究評価は、論文数や被引用数などの定量指標への過度な依存から脱却し、分野の特性や社会的インパクトを適切に捉える責任ある研究評価へ転換する必要があります。これが「研究力の危機と再構築」と同時に公表された提言「研究の活性化へ向けた研究評価の具体的な改善方策」の核心であり、研究評価に関するサンフランシスコ宣言や欧州の研究評価改革の合意に沿った具体的な再設計を求めています。

本会議は、この二つの提言に引き続き、海外第一線で活躍する研究者をロールモデルに議論を深め、研究力強化と国際的な頭脳循環を加速させる場といたします。若手研究者が世界で経験を積み、その知見を国内外で還元する循環は、研究エコシステムの回復力を高め、独創的研究の芽を育てます。本日の登

壇者による講演や議論が、まさにこの循環を実践する設計となっています。

本会議にご参加いただいている皆さま。本会議の対話とネットワーキングを通じて、評価設計を味方にし、時間と資金を研究へ取り戻し、国際的な往還を加速させてください。学術は公共善であり、データと知識の開放、責任ある評価、包摂的なキャリア支援が、持続可能な社会の基盤を築きます。

本日の議論が、研究力の再構築と頭脳循環の加速を具体的行動へと結び、循環経済・カーボンニュートラル、そして生成 AI との共生を含む持続可能な社会の実現に貢献することを心から期待します。

最後になりますが、日本学術会議は、今年の 10 月 1 日に法人として新たなスタートを切ります。世界最高のナショナル・アカデミーとして、国内外の学術の振興に貢献し、皆様からさらなる理解・信頼をいただけるような組織を目指していくことを申し上げて、結びといたします。

2. 会議について

持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議 2025 「将来の学術を担う若手研究者を中心とした研究力強化と頭脳循環を目指して」

- 会期: 令和8年2月 11日(水・祝) 10:00-17:25(日本時間)
2月 12日(木) 9:20-15:50(日本時間)
- 会場: ハイブリッド(日本学術会議講堂、ZOOM ウェビナー)
- 主催: 日本学術会議 国際委員会持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議 2025 分科会
- 後援: 内閣府科学技術・イノベーション推進事務局、外務省、文部科学省、経済産業省
- 言語: 日本語及び英語(同時通訳)

持続可能な社会のための
科学と技術に関する国際会議 2025

将来の学術を担う 若手研究者を中心とした 研究力強化と頭脳循環を目指して

2026.2.11(水祝) → 12(木)

ハイブリッド開催(会場: 日本学術会議講堂、オンライン: 申込者に URL 送付)
【言語】日本語・英語(同時通訳あり) 【定員】対面 200名/日、オンライン 600名/日
【主催】日本学術会議(国際委員会持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議 2025分科会)
【後援】内閣府 科学技術・イノベーション推進事務局 / 外務省 / 文部科学省 / 経済産業省

我が国が国際的に遜色のない研究力を発揮していくために、海外の第一線の大学・研究機関で活躍している研究者をロールモデルとして、こうした研究者がこれまでの活動から得た知見やそれに基づく提案を共有し議論を深めるとともに、世界規模で進行している国際頭脳循環の動向も十分に踏まえた上で、戦略的な研究人材の派遣や受け入れ等の対応について議論を行います。

2.11(水祝) **プログラム**

10:00-11:55 ▶ **オープニング**

プログラム詳細はこちら

基調講演① ウィルフレド・ファン・デル・ウィール
トゥエンテ大学ナノエレクトロニクス学科教授
脳啓発ナノシステムBRAINSセンター所長

基調講演② 深見 理
スタンフォード大学生物学科教授及び地球システム科学科教授
東京大学先端科学技術研究センター客員上席研究員
横浜国立大学総合学術高等研究院招聘教授

13:30-17:25 ▶ **パネルディスカッション①** 「若手研究者の研究力強化」

2.12(木)

9:20-13:00 ▶ **パネルディスカッション②** 「国際頭脳循環の促進」

14:00-15:30 ▶ **統合セッション**

15:30-15:50 ▶ **クロージング**

参加費 無料
託児所あり

参加登録はこちら

持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議 2025 事務局
(株式会社プライムインターナショナル)
TEL: 03-6277-0117 / E-mail: icsts2025@pco-prime.com
営業時間: 10:00-17:00(土・日・祝日・年末年始(12月27日~1月4日)は休業)
※休業日、営業時間外にお送りいただいたメールへの返信は翌営業日以降となります。

<https://www.scj.go.jp/ja/int/kaisai/jizoku2025/ja/>

3. コンセプトペーパー

持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議 2025

コンセプトペーパー

テーマ：将来の学術を担う若手研究者を中心とした研究力強化と頭脳循環を目指して

目的：

近年、我が国の研究力の低下について多くの懸念が表明されている中で、研究力を強化していくためには、将来の学術を担う主体となる、若手研究者の活躍が必須である。しかしながら、昨年度の「持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議 2024」でとりあげたとおり、若手研究者をとりまく環境は厳しい状況にある。中でも、キャリアとしての研究者の魅力の低下は、研究の担い手の減少に直結しうる課題と言える。我が国が国際的に遜色のない研究力を発揮していくためには、海外の第一線の大学・研究機関で活躍している研究者をロールモデルとして、こうした研究者がこれまでの活動から得た知見やそれに基づく提案を共有し議論を深めていくことが、志のある若手研究者の育成にとって効果的であると考えられる。

他方で、世界に目を向けると、気候変動を始めとして地球規模の課題が山積しており、国際交流や国際共同研究の機会は増大の一途をたどっている。国際頭脳循環という言葉が示すとおり、科学者の活躍のフィールドは一国にとどまらない状況であり、国際的な高度人材獲得競争が激化している。そのため、我が国の研究力の強化に向けては、我が国固有の事情にとどまらず、世界規模で進行している国際頭脳循環の動向も十分に踏まえた上で、戦略的な研究人材の派遣や受け入れ等の対応が求められる。

概要：

今回の「持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議 2025」においては、将来の学術を担う若手研究者の研究力強化と国際頭脳循環の促進を2つの中心テーマに据え、基調講演やパネルディスカッションを行う。2つのテーマは相互に関連するものであり、統合セッションにおいてそれぞれの議論から得られた知見を集約し、会議として一定の方向性を導くことを目指す。

① 若手研究者の研究力強化

海外拠点でPI（Principal Investigator：研究責任者）として活躍中の日本人並びに外国人研究者を招き、こうした研究者の経験を共有しながら議論を行う。そして、学部生・院生・ポストドクが海外で研究体験や自身の研究を進めるための様々な支援策やプログラムのあり方を探る。

また、海外での研究成果やネットワーク形成がその後キャリアパスに肯定的に働くようなインセンティブや評価制度、これまでの雇用慣行や給与・昇進システムにとらわれない柔軟な雇用体系等、日本人若手研究者が海外で研究に専念することを後押しするための制度改革についても議論を深める。さらには、世界の教育拠点に日本から優秀な人材を送り込み、日本との間を行き来する方策についての検討を深め、海外での日本人研究ネットワークの構築や強化も見据えた議論を行う。

② 国際頭脳循環の促進

欧米等、国際頭脳循環のハブとなっている国々から日本人並びに外国人の研究者を招き、受け入れ側の視点等も交えた国際頭脳循環の動向に関する見解を披露していただく。

これを受け、世界的な学術の動向を踏まえた国際頭脳循環のあるべき姿及び我が国としての貢献策について議論するとともに、我が国が世界から優秀な人材を引きつけるための方策についても検討を深める。

なお、社会課題の解決やイノベーションの創出には、分野やセクターを超えた連携・取組が要求されることから、大学や研究機関にとどまらず、政府関係機関や産業界等の多様なステークホルダーからの知見を広く求めるものとする。

4. プログラム

第1日目：2月11日（水・祝） 若手研究者の研究力強化

時間	タイトル	概要
10:00-11:55 オープニング		
10:00-10:05	開会挨拶	光石 衛 (日本学術会議会長、独立行政法人大学改革支援・学位授与機構理事、東京大学名誉教授)
10:05-10:10	来賓挨拶	小野田 紀美 (内閣府特命担当大臣(科学技術政策))
10:10-10:25	趣旨説明	磯 博康 (日本学術会議副会長、持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議2025分科会委員長、国立国際医療研究センター国際医療協力局グローバルヘルス政策研究センター長/理事長特任補佐)
10:25-10:55	政府等の取組	坂下 鈴鹿 (文部科学省大臣官房審議官(研究振興局及び高等教育政策連携担当)) 小谷 元子 (理化学研究所領域総括)
10:55-11:25	基調講演①	ウィルフレド・ファン・デル・ウィール (トゥウェンテ大学ナノエレクトロニクス学科教授、脳啓発ナノシステムBRAINSセンター所長)
11:25-11:55	基調講演②	深見 理 (スタンフォード大学生物学科教授/地球システム科学科教授、東京大学先端科学技術研究センター客員上席研究員、横浜国立大学総合学術高等研究院招聘教授)
12:05-13:15	昼食	
13:30-17:25 パネルディスカッション①		
13:30-13:40	モデレーターによる説明	北島 薫 (京都大学大学院農学研究科教授)
13:40-14:05	プレゼン①	濱田 文香 (カリフォルニア大学デービス校教授)
14:05-14:30	プレゼン②	アナ・ドレバー・アルメンバーク (ストックホルム商科大学教授)
14:30-14:55	プレゼン③	ロブ・ジェンキンス (ヨーク大学教授)
14:55-15:10	若手の視点	龍見 史恵 (沖縄科学技術大学院大学准教授)
15:10-15:25	コーヒーブレイク	
15:25-17:25	パネルディスカッション	濱田 文香 (カリフォルニア大学デービス校教授) ロブ・ジェンキンス (ヨーク大学教授) 大垣 昌夫 (同志社大学経済学部特別客員教授) 小谷 元子 (理化学研究所領域総括)

第2日目：2月12日（木） 国際脳循環の促進

時間	タイトル	概要
9:20-13:00 パネルディスカッション②		
9:20-9:30	モデレーターによる説明	狩野 光伸 (岡山大学副理事/副学長/学術研究院ヘルスシステム統合科学学域教授)
9:30-9:55	プレゼン④	ケシャブ・エム・ダニ (沖縄科学技術大学院大学フェムト秒分光法ユニット教授)
9:55-10:20	プレゼン⑤	五十嵐 啓 (カリフォルニア大学アーバイン校大学総長特別准教授、東北大学医学系研究科認知生理学分野国際卓越教授)
10:20-10:45	プレゼン⑥	リース・カッセン (マギル大学教授)
10:45-11:00	コーヒーブレイク	
11:00-13:00	パネルディスカッション	ケシャブ・エム・ダニ (沖縄科学技術大学院大学フェムト秒分光法ユニット教授) 五十嵐 啓 (カリフォルニア大学アーバイン校大学総長特別准教授、東北大学医学系研究科認知生理学分野国際卓越教授) リース・カッセン (マギル大学教授) 阪 智香 (関西学院大学商学部教授)
13:00-14:00	昼食	
14:00-15:30 統合セッション		
14:00-15:30	セッション	ウィルフレッド・ファン・デル・ウィール (トゥウェンテ大学ナノエレクトロニクス学科教授、脳啓発ナノシステムBRAINSセンター所長) 深見 理 (スタンフォード大学生物学科教授及び地球システム科学科教授、東京大学先端科学技術研究センター客員上席研究員、横浜国立大学総合学術高等研究院招聘教授) 濱田 文香 (カリフォルニア大学デービス校教授) ロブ・ジェンキンス (ヨーク大学教授) リース・カッセン (マギル大学教授) ケシャブ・エム・ダニ (沖縄科学技術大学院大学フェムト秒分光法ユニット教授) 磯 博康 (日本学術会議副会長、持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議2025分科会委員長、国立国際医療研究センター国際医療協力局グローバルヘルス政策研究センター長/理事長特任補佐)
15:30-15:50 クロージング		
15:30-15:45	総括	磯 博康 (日本学術会議副会長、持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議2025分科会委員長、国立国際医療研究センター国際医療協力局グローバルヘルス政策研究センター長/理事長特任補佐)
15:45-15:50	閉会挨拶	菅野 早紀 (青山学院大学経済学部准教授)

5. 会議報告

持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議 2025

「将来の学術を担う若手研究者を中心とした研究力強化と頭脳循環を目指して」

本会議は、日本学術会議の主催、及び内閣府（科学技術・イノベーション推進事務局）、外務省、文部科学省、経済産業省の後援により開催された。持続可能な社会の実現に向けて、将来の学術を担う若手研究者の育成や研究力の強化、また国際的な頭脳循環の重要性やその方策について議論が行われた。

第1日目（2月11日（水・祝））

1. 開会式

1) 開会挨拶：光石 衛 日本学術会議会長

本会議は、持続可能な社会の実現に向け、若手研究者の研究力強化と国際頭脳循環を主要テーマとして開催される。日本学術会議は研究エコシステムの危機に対応する提言を公表し、安定的資金、人材育成、責任ある研究評価への転換を進めている。複合的課題が増す中、多様な知の創出と国際的な往還が不可欠である。本会議は海外で活躍する研究者を招き、循環型の研究環境を議論する場である。対話とネットワークを通じて研究時間と資源を取り戻し、持続可能な未来に貢献する行動につなげたい。

2) 来賓挨拶：小野田 紀美 内閣府特命担当大臣（科学技術政策）

本会議は「若手研究者の研究力強化と国際頭脳循環」をテーマに、国内外の研究者が最新の学術動向を共有し、社会課題の解決や持続的イノベーションを議論する場として開催されるものである。国際的な人材獲得競争が激化する中、日本政府はJ-RISE イニシアティブを通じ、研究者に魅力ある環境づくりを進めている。併せて、多様な人材育成や制度改革を通じた研究力向上も重要であり、本会議での知見共有と活発な議論を期待する。

3) 趣旨説明：磯 博康氏（日本学術会議副会長、日本学術会議「国際委員会持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議 2025 分科会」委員長、国立国際医療センター国際医療協力局グローバルヘルス政策研究センター長／理事長特任補佐）

本会議では、若手研究者の創造性の涵養と国際的な頭脳循環を中心に議論する。日本では研究予算の実質的縮小や帰国後の待遇不安から若手が海外に出にくくなっており、研究力低下の懸念が示されている。好奇心を起点とする研究を継続するには長期的支援が不可欠であり、海外のロールモデルとの交流や国際的循環の促進が重要である。本会議では、若手が国内外で挑戦し続けられる環境整備こそ、科学発展の基盤であることを確認していく。

4) 政府等の取組

(1) 文部科学省：坂下 鈴鹿氏（文部科学省大臣官房審議官（研究振興局及び高等教育政策連携担当））※オンラインでの登壇

1995年の科学技術基本法制定以来、我が国は、社会・経済の発展や国民の福祉の向上、持続可能な発展に貢献するものとして、科学技術を継続的に振興。第7期基本計画骨子案の一つ目の柱では、新分野の開拓・先導、国際的研究動向の牽引、魅力ある研究環境の整備・強化を重視している。2025年には、日本人研究者2名がノーベル賞を受賞。さきがけのような若手研究者支援制度や

SPring-8のような大型施設といった日本の研究環境が、現在世界を牽引する新しい研究領域を切り開いた。日本の大学の国際競争力強化には世界トップレベルの研究者誘致、若手研究者の独立支援、研究時間確保等が不可欠であり、国際卓越研究大学制度や、WPI (World Premier International Research Center Initiative: 世界トップレベル研究拠点プログラム) などを通じて研究環境整備、若手支援、国際頭脳循環等を推進している。また、新領域開拓や国際化の遅れ、若手の研究時間不足といった課題の解決が必要であり、昨年成立した補正予算と2026年度概算要求において、科研費改革のための予算を大幅に拡充するとともに、運営費交付金を増額した。

(2) 外務省：小谷 元子氏（外務大臣次席科学技術顧問/理化学研究所領域総括 / 東北大学 理事、同大学院理学研究科 教授 / 材料科学高等研究所 (AIMR) 主任研究者)

AIを含む技術革新に加え、地政学的緊張の高まりにより不確実性が高まる現代において、一国では解決できない課題への科学的国際協力の重要性が一段と高まっている。外務省はの中で、科学技術外交強化の観点から、科学技術顧問制度の設置や専門家22名によるアドバイザリーボードによって科学的知見を政策へ還元しつつ、6か国の在外公館に設置した科学技術フェロー制度を通じて国際的な科学ネットワークの構築を進めてきた。第7期科学技術基本計画でも初めて「戦略的科学技術外交の推進」が独立章として明記されたことも、科学技術外交が重視されていることを示している。大型プログラムであるJ-RISEや準備中のホライズン・ヨーロッパのような取組をはじめ、WPIのような成功例のような国際共同研究や頭脳循環を促進する制度が拡充されている。さらに、日本人研究者の海外ネットワークを可視化するPIマップも始動し、研究力強化と国際頭脳循環促進が重要な戦略として示されている。

5) 基調講演

(1) ウィルフレッド・G・ファン・デル・ウィール氏（トゥウェンテ大学 MESA+脳啓発ナノシステム BRAINS センター 所長 / ミュンスター大学物理学研究所)

若手研究者の国際的な移動及び交流は、異文化や異分野に触れる経験が創造性と競争力を高める観点からも戦略的な意義がある。科学技術を支える基盤は、国境を越えた信頼関係と長期的な人脈である。また、短期滞在では十分な成果が得られないため、半年以上の滞在が研究と関係構築を深めるために必要である。加えて、トップダウンとボトムアップ双方による持続的な研究振興の仕組みづくりが重要である。トップダウンであれば、形式的なMoUにとどまらず、共同プログラムやJST-オランダ連携を始めとする国際共同ファンディングのような制度的枠組みにより、持続的な国際頭脳循環と信頼構築が可能となる。また、ボトムアップであれば、共同研究や研究者同士が学会等の場で自発的につくる国際的ネットワークが考えられるが、こうした現場発の繋がりが継続的な共同研究や信頼醸成につながり、この積み重ねが最も強固な国際連携を形成していく。科学の発展は最終的に、人と信頼に基づくものである。

【主な質疑応答】

日本では定年退職となる教授の増加による国内ポスト増で、若手が海外に出る意欲が低下する状況がある一方、欧州ではポストクの海外経験が常識となり、流動性向上に制度が機能している。海外経験は異文化理解に不可欠で、日本でも外に出る仕組みづくりが必要だと指摘された。

(2) 深見 理氏（スタンフォード大学生物学科教授及び地球システム科学科 教授 / 東京大学先端科学技術研究センター 客員上席研究員 / 横浜国立大学総合学術高等研究院 招聘教授)

日本の研究力向上には高校及び大学段階からの海外留学支援を拡充し、英語圏文化と日本文化の双方を理解するバイカルチュラルな研究者を育成することが重要である。異文化的視点が国際課題、特にサステナビリティ分野への貢献に資する中、日本にはアニミズム的自然観などサステナビリティ研究に貢献し得る文化的資源があり、それらを英語で分かりやすく伝えることで日本の学術の国際的プレゼンスを向上することができる。その基盤として、国際的な発信のためには、日本文化を身につけた後で他文化を柔軟に吸収できるポストドク前の若い時期の海外経験が最も効果的である。こうしたバイカルチュラルな人材を十分に増やすことで海外経験者の臨界量を形成し、留学を一般化させることが、将来の国際的研究貢献につながる。

【主な質疑応答】

英語圏に限らない多文化理解の重要性や、人格や身体言語の違いが相互理解に影響する点が議論され、幼少期からの多文化経験の必要性が示された。また、多文化性を重視する教育・人材登用の例も紹介された。

2. パネルディスカッション1

1) モデレーターからの説明：北島 薫氏（京都大学大学院農学研究科 教授）

若手研究者が「小さな池の大きな魚」に留まらず、恐れがあっても「広い海」に踏み出すことが成長につながる。海外での挑戦はメンターとの出会いや想定外の好機をもたらす得るが、一方で人生や家族事情が海外経験を含むキャリア形成に影響すると触れつつ、才能を埋もれさせないために、研究・生活の両立をいかに支えるかを議論する必要性がある。

2) プレゼンテーション

(1) 濱田 文香氏（カリフォルニア大学デービス校 教授）

若手研究者の活躍には環境整備が不可欠である。特に、夫婦双方が研究者として働くためのデュアルキャリア支援については、米国では制度化され多くの大学が2名同時採用を行っており、日本でも導入する必要がある。また、米国では若手が大規模研究費を獲得できる仕組みも整っているが、一方で日本は、PRESTOをはじめとした若手及び独立研究者向け競争的資金やシニア研究者と交流できる研究討論機会などの支援環境が優れている。日本でのこうした点を生かしつつ、デュアルキャリア制度の拡充により、日本の若手研究者も家庭及びキャリアを両立しながら独立が可能となることを期待する。

【主な質疑応答】

LGBTQ 政策の影響については、州や大学の自治により大学のデュアルキャリア制度への影響は限定的であり、特にカリフォルニアではLGBTQカップルも通常のカップルと同様に採用対象となると説明された。また、日本では研究者夫婦の別居も見られるが、米国ではカップルとして応募する戦略が取られることが多い点が紹介された。さらに、同分野の夫婦研究者については、かつては研究室や資金を共有する形もあったが、近年はそれぞれ独立したポジションを与える形へと変化している。

(2) アナ・ドレパー・アルメンバーク氏（ストックホルム商科大学 教授）※オンラインでの登壇

好奇心を起点とする研究には柔軟で長期的な資金制度が不可欠である。スウェーデンのWallenberg Academy Fellowsのように、メンター制度やネットワーク形成の提供だけでなく、研究

の過程で発生する研究内容及び方針の方向転換も含めて長期かつ柔軟に挑戦的な研究を支援できる資金提供プログラムの存在が、大規模な再現性研究やチームサイエンスの展開を支える基盤となる例がある。研究評価や資金配分は研究者の行動に強く影響するため、柔軟性を持つ仕組みこそ若手のリスクテイクを支え、科学及び学術全体の健全な発展につながる。

(3) ロブ・ジェンキンス氏（ヨーク大学 教授）

現代は技術の進歩によって好機と危険が同時に増大するより不確実な時代であり、生存と繁栄を分ける鍵は正しい知識である。知識は人々の頭の中に分散しているため、国際協力を含むネットワークによる多様な視点の集合知が最良の解を生む。さらに、国際的な研究協力においては、多様性は単なる背景要員ではなく、創造性を生み出す資源として活用すべきである。その際、多様な視点を統合するための思考フレームが役立つほか、意図的な集団プロセスの設計が効果的である。また、研究テーマの選択においては、ITN フレームワーク（重要性、実行可能性、未開拓性）の活用により、若手研究者は多様な視点と分散した知識を結びつけながら、不確実性を減らし未来への貢献度の高い研究を主体的に見出すことができる。さらに、国際頭脳循環は、人の移動だけでなく知識を伝播し分散した知識を統合する仕組みそのものであり、未来を正の方向へ導く条件づくりそのものである。

【主な質疑応答】

今後、若者には創造的思考法を体験してもらうことが有効とされ、多様な視点が生まれる環境の重要性や、言語の違いは障害ではなく資源であることが強調された。また、海外挑戦に過度な英語不安を抱く必要はないことが強調された。

加えて、助成金が既存の人気分野に偏る問題に対しては、未開拓の重要領域を発見し指摘することが新分野育成の鍵だと述べられた。また、ブーム分野でも新しい角度を示せば支援を得られ、視野を狭めず機会を逃さない姿勢が重要だと強調された。

(4) 龍見 史恵氏（沖縄科学技術大学院 准教授 / ボストン大学生物学部 博士研究員）※オンラインでの登壇

米国では高い研究基準、開かれた議論環境、体系的なメンタリング、充実したキャリア支援により若手研究者の成長を促し、育児との両立を支える柔軟性も備えた環境が存在していた。一方、日本では重い事務負担、働き方の硬直性、育児支援の不足、長時間会議などが研究継続や海外経験者の帰国を妨げ、能力とは無関係に研究者を排除しうる構造的障壁となっている。日本の研究力強化のためには、国際基準との整合性、十分な資金と制度的支援、柔軟な働き方と文化の改革により、真に競争力のある研究者の採用し、能力を最大限に発揮するために不可欠である。

3) パネルディスカッション：北島 薫氏、小谷 元子氏、濱田 文香氏、ロブ・ジェンキンス氏、大垣 昌夫氏（同志社大学経済学部 特別客員教授）

会場参加者も交えながら若手研究者の研究力強化を「科学の創造性」と「研究キャリアの持続可能性」の二つの観点から総合的に議論し、若手研究者の国際的活躍を促すための条件と、日本社会に根強く存在する阻害要因を多角的に検討した。

「科学の創造性」については、創造性が異なる視点の衝突と集約によって高められるという認識が共有された。また、評価に偏らない自由な探求や失敗を学びとして扱う文化こそが挑戦の基盤になるとの点で一致した。こうした条件は、国際的な研究現場に特徴的な要素と重なるため、創造性を高める環境づくりが、そのまま研究者の国際的活躍を後押しする基盤になると位置づけられた。

「研究キャリアの持続可能性」については、個人のライフステージに左右されずに研究活動を継続できる柔軟な制度、安定的で長期的な資金制度、そして複線的なキャリアパスの確保が不可欠とされた。特に日本では、失敗回避や年齢制限、硬直したキャリアパスが研究者のリスクテイクを妨げ、海外へ出た若手が帰国しにくい構造も指摘された。他方、日本においても OIST や WPI の成功例は、国際基準の審査、柔軟な採用、充実した研究支援が優秀な研究者を引きつけることを示しているなど多くの海外挑戦支援制度は存在するにもかかわらず、情報が届かず若手が利用できていないという課題も指摘された。

総じて、創造性と持続可能性は切り離せないテーマであり、多様性、柔軟性、長期性の三つを軸にした研究環境の再構築が、日本の研究力を高める鍵であるとの方向性が示された。また、国際交流や国際頭脳循環は知識を移動させ創造性を高める仕組みとして重要であり、ネットワーク、メンタリング、ロールモデルの存在や、制度改革と価値観の転換を通じて、若手研究者が「広い海」で挑戦し続けられる環境づくりが不可欠であるとまとめられた。

第2日目（2月12日（木））

1. パネルディスカッション2

1) モデレーターからの説明：狩野 光伸氏（岡山大学副理事/ 附属学校機構長/教授）

前日の議論として、人脈やバイカルチュラルな視点、家族を含む研究環境、多様な資金源の重要性を確認した。創造性を「他者や過去と異なるものを誰かのために生み出すこと」と再定義し、それを踏まえて本日の会議では、国際頭脳循環の意義を検討する。研究は未来の他者の不確実性に答える営みであり、資金配分や人材選考の難しさも指摘された。本日はその議論を踏まえ、国際頭脳循環に焦点を当てる。

2) プレゼンテーション

(1) ケシャブ・エム・ダニ氏（沖縄科学技術大学院大学フェムト秒分光法ユニット教授）

従来の競争的グラント制度は、厳格な審査と透明性により健全な学術の基盤となっている一方、既存知に反する大胆な研究は拾いにくい構造を持つ。このため、革新的研究を生むには、若手研究者の成熟度、独立性、創造性、大胆さといった要素を見極める新たな選抜方法が必要であり、書類審査に依存せず世界的に才能を現場から発掘する仕組みが有効である。成果評価としても論文数に依存するのではなく、失敗を許容し創造的挑戦の価値を理解する制度を整えることが、創造性を押し上げるうえで重要である。さらに、日本においては、研究者が社会的インパクトや商業化にも関与できる文化形成も重要である。また、国際的な繋がりは重要である一方、それが大きくなるほど外部の意見や評価にもさらされるため、自身の思考に集中する時間を確保しバランスを取ることも突破的成果を生むうえで必要である。加えて、家族の幸福など生活面の支援こそ良い研究の前提条件であるため、研究者の生活環境整備が研究支援全体の基盤として不可欠である。

(2) 五十嵐 啓氏（東北大学大学院医学系研究科 国際卓越教授 /カリフォルニア大学アーバイン校医学部 総長特別准教授）

欧米では、高い給与水準、安定した契約、育児支援、早期の研究独立、そして大型研究費へのアクセスが整備され、若手から教授までが研究に専念できる環境が確保されている。一方、日本では大学院生やポスドクの処遇の低さや教員階層構造による独立の遅れ、年功序列的な研究費配分が課題である。この課題により、研究者が創造性や成果を発揮する機会の喪失や産業界への人材流出が起こっており、早期独立制度の整備や給与倍増などの制度改革は重要である。日本におけるOISTや国際卓越研究大学制度など新たな改革の動きは歓迎しつつ、研究者とその家族が安心して働ける幸せな環境整備は、優秀人材を惹きつけ創造的な研究の基盤として不可欠である。

(3) リース・カッセン氏（マギル大学 進化生物学 教授、トロティエ科学公共政策研究所 所長）

国際協力が不可欠となる現代の研究環境では、信頼が最重要基盤となる。信頼を築くためには、若手研究者にはGlobal Young Academyのような多国籍かつ分野横断的なネットワークを通じた仲間同士の相互支援、状況に応じて役割を柔軟に担う協働的リーダーシップ、地域社会や産業及び行政と共創するための協働への開放性という三つの視点が重要である。科学への社会的信頼は不可欠であるが、これらを踏まえて多様な立場の人々と協働しながら課題解決に向き合う姿勢こそが、若手研究者が国際的に活躍するうえで重要な条件である。

3) パネルディスカッション：狩野 光伸氏、ケシャブ・エム・ダニ氏、五十嵐 啓氏、リース・カッセン氏、阪 智香氏（関西学院大学商学 教授）

国際的な頭脳循環を軸に、科学への信頼、研究環境、制度改革が総合的に議論された。科学と社会の関係では、地域課題に応える可視的成果の提示や、女性の社会進出を含むダイバーシティとインクルージョンを基盤とした関係構築、そして科学投資を未来への投資として社会に理解されることの重要性が示された。また、ビザ取得の困難さが研究者往来を阻害し、制度面の改善が必要とされた。若手研究者の環境整備として、従来型査読に加えて挑戦的研究を支える資金や、早期独立と柔軟なPI構造、生活基盤の支援が求められた。国際協力の前提となる信頼を強化するため、多国籍及び分野横断の仲間同士の相互支援、協働的リーダーシップ、社会との協働への開放性の有効性も共有された。さらに、年功序列の緩和、多様性確保、帰国後のポスト不足、PhDへのインセンティブ、平等ではなく公正の観点に基づく支援など制度的課題が指摘された。総じて、信頼、挑戦性、独立性、多様性を柱とした包括的改革が、国際頭脳循環と日本の研究力向上に不可欠と整理された。

2. 統合セッション及び総括：磯 博康氏、ウィルフレッド・G・ファン・デル・ウィール氏、深見理氏、濱田 文香氏、ロブ・ジェンキンス氏、ケシャブ・エム・ダニ氏、リース・カッセン氏

統合セッションでは、研究者の幸福、研究予算及び環境、そして日本政府への研究環境改善提案という三つの論点を中心に議論が行われた。まず、研究者の幸福については、研究コミュニティへの帰属、生活基盤の安定、家族からの支援、異文化の中で自身の能力を発揮できる環境、研究外の趣味を持つ余裕など、心身の充足が創造的研究の前提となる点が共有された。また、キャリア段階に応じて得られる貢献実感や存在意義や、研究室内の健全なチーム形成も研究者の幸福を支える要素として認識された。次に、研究予算及び環境に関する議論では、日本ではポスドクからPIまでに長期を要する構造、デュアルサポートやメンター制度の不足が課題として挙げられた。研究費の増額には、公的資金拡充に加え、民間ファンドの活用、基礎と応用の適切な配分、プログラム型資金による安定性、自律性を確保できる制度設計が必要とされた。また、研究環境面としての国際連携では、形式的なMoUの数よりも実効性が重視され、サバティカルやジョイント/デュアル学位の整備、大学事務の国際対応力向上が求められた。最後に、日本政府への提案としては、国際共同研究枠組への参画、若年層の海外留学支援、博士号取得の魅力向上、産業界とアカデミア双方でのキャリア機会拡大、若手アカデミーの強化、文化資源の活用、学費支援やローン制度の整備などが示された。教育機能の強化や、研究者カップルの育児支援といった生活面の制度整備も頭脳循環を支える基盤と位置づけられ、議論は今後の政策提言に向けた重要な示唆として締めくくられた。

3. 閉会挨拶：菅野 早紀氏（青山学院大学経済学部）

2日間の国際的で多様な議論の重要性を確認するとともに、本会議での経験を同世代の若手研究者や次世代の研究者へ共有していくことが必要である。幸福への根源的な関心は普遍であり、今後の学術を担う若手として、国境、ジェンダー、分野を越えた協働の必要性や働き方の柔軟性や包摂性を備えた環境整備は重要である。科学及び学術は知識創出にとどまらず、すべての生命の幸福に資するものであるべきである。今回の会議に参加した全員に感謝をしたい。

6. 写真

第1日目（2月11日（水・祝））

開会挨拶



光石 衛 日本学術会議 会長

来賓挨拶



小野田 紀美 内閣府特命担当大臣
(科学技術政策)

趣旨説明



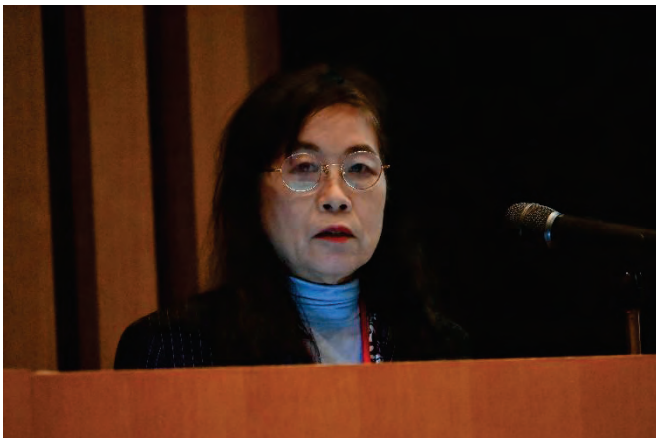
磯 博康氏

政府等の取組（文部科学省）



坂下 鈴鹿氏

政府等の取組（外務省）



小谷 元子氏

基調講演 1



ウィルフレッド・G・ファン・デル・ウィール氏

基調講演 2



深見 理氏

モデレーターからの説明



北島 薫氏

プレゼンテーション 1



濱田 文香氏

プレゼンテーション 2



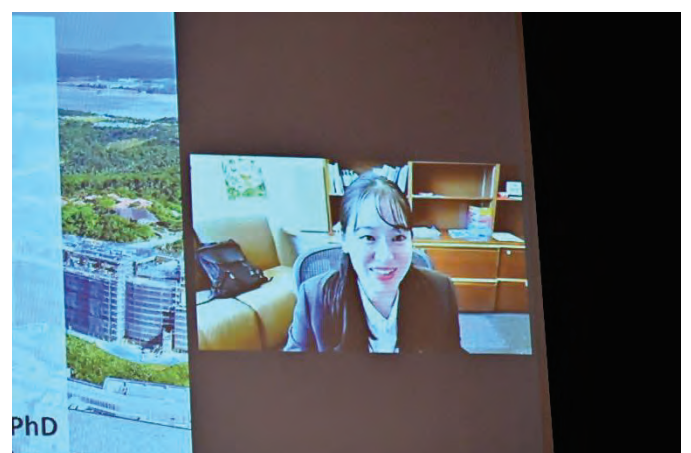
アナ・ドレバー・アルメンバーク氏

プレゼンテーション 3



ロブ・ジェンキンス氏

若手の視点



龍見 史恵氏

パネルディスカッション1



第2日目 (2月12日 (木))

モデレーターからの説明



狩野 光伸氏

プレゼンテーション4



ケシャブ・エム・ダニ氏

プレゼンテーション5



五十嵐 啓氏

プレゼンテーション6



リース・カッセン氏

パネルディスカッション2



統合セッション

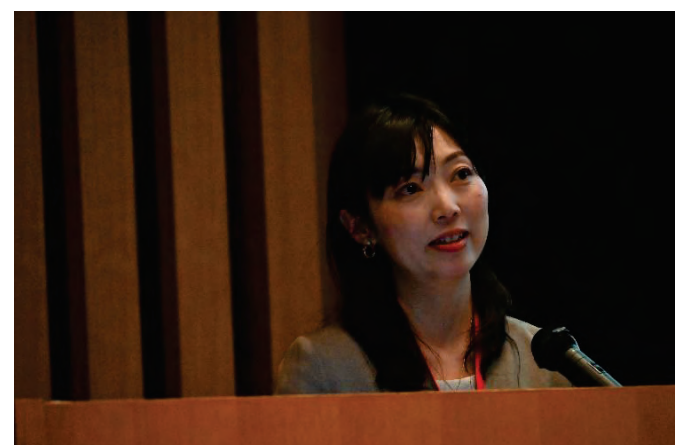


総括



磯 博康氏

閉会挨拶



菅野 早紀氏

集合写真

第1日目



第2日目

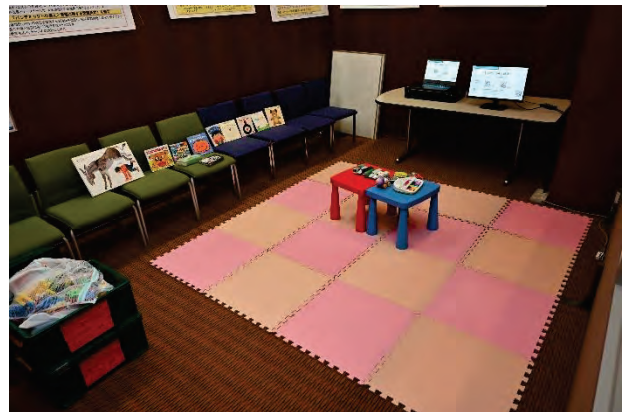


会場

講堂



キッズスペース



日本学術会議



7. 開催実績

- ◆ 2003年12月16日（火）～ 19日（金） エネルギーと持続可能な社会のための科学【東京】
- ◆ 2004年11月10日（水）～ 12日（金） アジアの巨大都市と地球の持続可能性【東京】
- ◆ 2005年9月9日（金）～ 10日（土） アジアのダイナミズムと不確実性【京都】
- ◆ 2006年9月8日（金）～ 9日（土） グローバル・イノベーション・エコシステム【京都】
- ◆ 2007年9月7日（金）～ 8日（土） 国際開発協力【東京】
- ◆ 2008年9月12日（金）～ 13日（土） 持続可能な福祉を求めて【東京】
- ◆ 2009年9月17日（木）～ 18日（金） 食料のグローバルな安全保障【東京】
- ◆ 2010年12月16日（木）～ 17日（金） 生物多様性の保全と持続可能な利用【石川】
- ◆ 2011年9月14日（水）～ 16日（金） グローバルな持続可能性の構築に向けて：アジアからの視点【京都】
- ◆ 2013年1月17日（木）～ 18日（金） 災害復興とリスク対応のための知【東京】
- ◆ 2013年10月9日（水）～ 10日（木） 巨大複合災害（地震・津波・原子力発電所事故）－影響波及と対策、及び将来に向けての政策選択－【東京】
- ◆ 2014年7月18日（金） 地球持続性に向けた学術の統合と人材育成【東京】
- ◆ 2015年11月15日（日） フューチャー・アース【東京】
- ◆ 2017年1月27日（金） 持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向けた超学際研究とマルチステークホルダー協働の推進【東京】
- ◆ 2017年3月1日（水）～ 3日（金） AASSA地域ワークショップ－包摂的な社会のための科学の役割－【東京】
- ◆ 2017年11月23日（木）～ 25日（土） 災害レジリエンス構築のための科学・技術国際フォーラム2017【東京】
- ◆ 2019年3月6日（水） 海洋生態系への脅威と海洋環境の保全－特に気候変動及び海洋プラスチックごみについて【東京】
- ◆ 2020年9月3日（木）～ 4日（金） グローバル時代の包摂を考える－COVID19後の持続可能な社会－【オンライン】
- ◆ 2022年1月31日（月）～ 2月1日（火） ネットゼロ・エミッション－達成に向けた学術の役割－【オンライン】
- ◆ 2023年1月25日（水）～ 26日（木） 災害と健康【オンライン】
- ◆ 2023年9月7日（木）～ 8日（金） 壊滅的災害に対してレジリエントで持続可能な社会への変革【東京、オンライン】
- ◆ 2025年2月3日（月） 持続可能なイノベーション創出のためのエコシステム～2040年の科学・学術と社会を見据えて～【東京、オンライン】
- ◆ 2026年2月11日（水・祝）～ 12日（木） 将来の学術を担う若手研究者を中心とした研究力強化と頭脳循環を目指して【東京、オンライン】



日本学術会議
SCIENCE COUNCIL OF JAPAN

〒 106-8555 東京都港区六本木 7-22-34 電話 03-3403-3793 (代表)

<https://www.scj.go.jp/>